

I 全数把握対象疾患の発生動向

1 一類、二類感染症及び三類感染症の発生動向

1) 一類、二類感染症の患者情報

2022年の埼玉県及び全国の一類、二類感染症の届出数を表 I-1-1 に示した。

一類感染症は、疑似症患者を含め埼玉県、全国ともに届出はなかった。

埼玉県に届出のあった二類感染症は、結核 757 人で、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 SARS コロナウイルスであるものに限る)、中東呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 MERS コロナウイルスであるものに限る)及び鳥インフルエンザ(H5N1 及び H7N9)の各疾患の届出はなかった。

表 I-1-1 一類・二類感染症の届出数 (2022 年)

疾患名		埼玉県	全国*
一類	エボラ出血熱	-	-
	クリミア・コンゴ出血熱	-	-
	痘そう	-	-
	南米出血熱	-	-
	ペスト	-	-
	マールブルグ病	-	-
	ラッサ熱	-	-
二類	急性灰白髄炎	-	-
	結核	757	14,798
	ジフテリア	-	-
	重症急性呼吸器症候群	-	-
	中東呼吸器症候群	-	-
	鳥インフルエンザ(H5N1)	-	-
	鳥インフルエンザ(H7N9)	-	-

*全国は診断週(1~52週)の集計値

(-:0)

ア 結核

男性 447 人、女性 310 人の計 757 人の届出があり、前年の 834 人と比べ減少した。類型別では患者 516 人、無症状病原体保有者(潜在性結核感染症) 240 人、疑似症患者 1 人の届出があり、患者は前年の 592 人より減少した(図 I-1-1)。

男性では患者が 319 人、無症状病原体保有者が 128 人で、60 歳以上が 65.8%を占め、80 歳代、70 歳代の順に多かった。女性では患者が 197 人、無症状病原体保有者が 112 人、疑似症患者 1 人で、60 歳以上が 61.3%を占め、80 歳代、70 歳代の順に多かった(表 I-1-2)。

年代別の患者の経年推移では、65 歳以上の患者数は年々減少し、2022 年は過去 5 年と比較し最も少なかったものの、患者全体に占める割合は 68.4%と最も高かった。また、小児(0-14 歳)では 2 名の報告があり、例年と同様であった(図 I-1-2)。

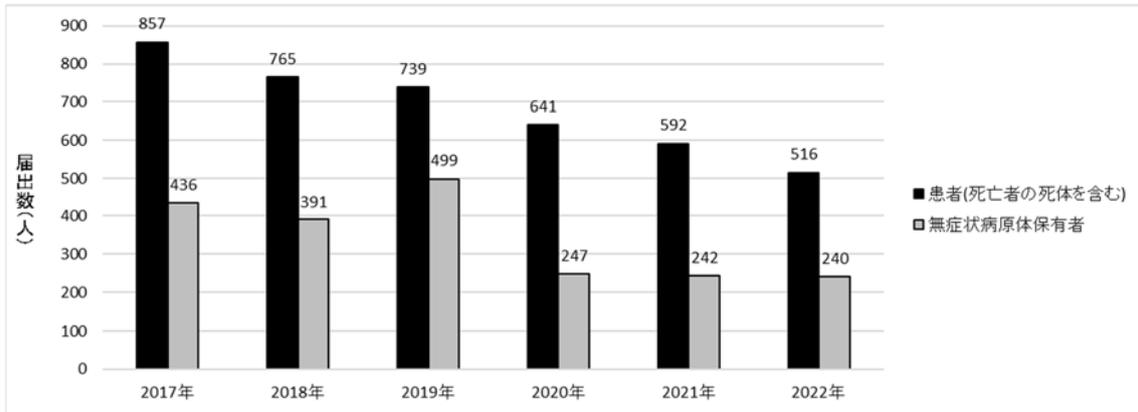


図 I-1-1 結核 類型別届出数 (2017~2022年)

表 I-1-2 結核 類型別の性年齢階級別届出数

年齢階級	男性			女性				総数
	患者	無症状病原体保有者	小計	患者	無症状病原体保有者	疑似症患者	小計	
10歳未満	—	12	12	1	8	—	9	21
10歳代	5	2	7	—	6	—	6	13
20歳代	15	12	27	10	7	—	17	44
30歳代	16	8	24	14	8	—	22	46
40歳代	22	11	33	14	21	—	35	68
50歳代	33	17	50	14	17	—	31	81
60歳代	37	13	50	14	7	—	21	71
70歳代	81	26	107	41	24	—	65	172
80歳代	89	24	113	61	11	1	73	186
90歳以上	21	3	24	28	3	—	31	55
合計	319	128	447	197	112	1	310	757
割合	42.1%	16.9%	59.0%	26.0%	14.8%	0.1%	41.0%	100%

(-0)

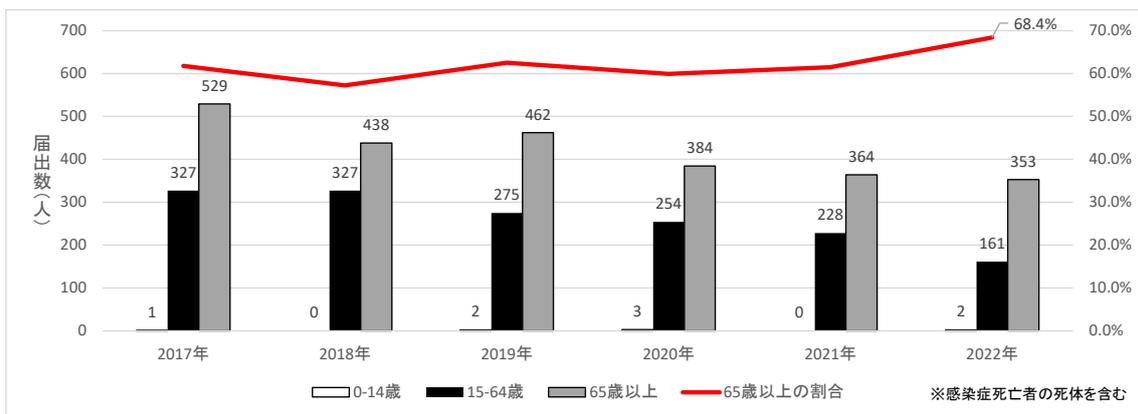


図 I-1-2 結核 年代別患者届出数及び65歳以上の割合 (2017~2022年)

2) 一類、二類感染症の病原体検出状況

一類感染症の検出はなかった。

二類感染症の結核菌は、遺伝子中の多重反復配列の反復数を株間で比較する Variable Numbers of Tandem Repeats 法 (VNTR 法) 等の遺伝子解析を埼玉県衛生研究所及びさいたま市健康科学研究センターで実施している。2022年に医療機関から収集され、遺伝子解析に供試された肺結核患者由来の分離菌株は134株であった。これらの解析結果では、北京型は91株(67.9%)、非北京型は43株(32.1%)であった(表 I-1-3)。さらに、北京型91株の系統推定では63株(69.2%)が祖先型、27株(29.7%)が新興型であった(表 I-1-4)。結核菌全体のうち北京型が占める割合や、北京型の系統推定は、過去5年間と同様の傾向になっていた(図 I-1-3、図 I-1-4)。

表 I-1-3 結核菌の北京型別

	北京型	非北京型
株数	91	43
割合	67.9%	32.1%

表 I-1-4 北京型の系統推定

	祖先型	新興型	推定不能
株数	63	27	1
割合	69.2%	29.7%	1.1%

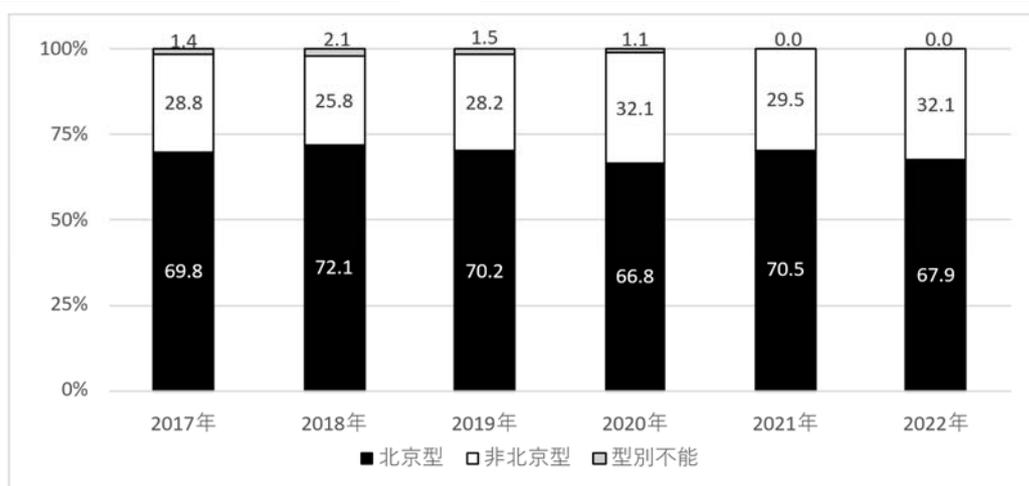


図 I-1-3 結核菌北京型別割合 (2017年～2022年)

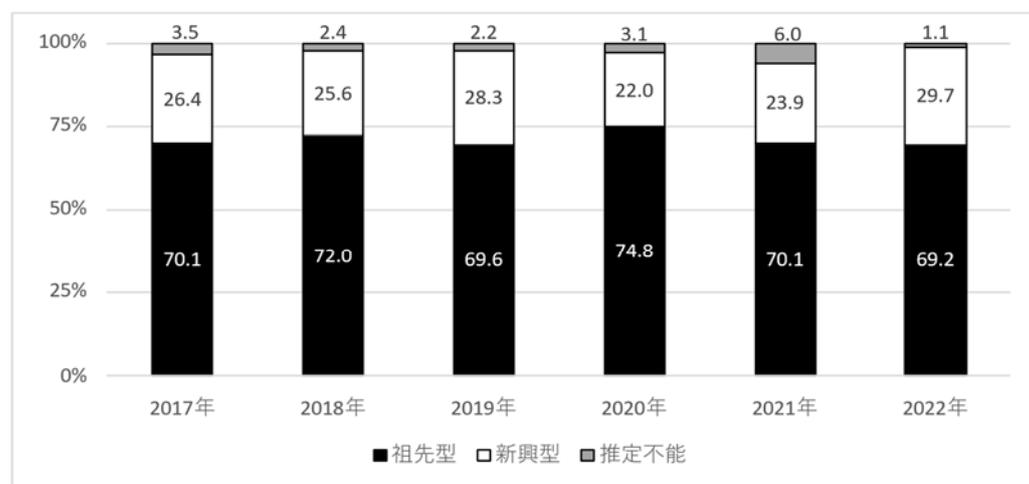


図 I-1-4 北京型の系統推定割合 (2017年～2022年)

3) 三類感染症の患者情報

2022年の埼玉県及び全国の三類感染症の届出数を表 I-1-5 に示した。

埼玉県に届出のあった三類感染症は、腸管出血性大腸菌感染症 144 人、腸チフス 1 人であった。

表 I-1-5 三類感染症の届出数 (2022 年)

疾患名		2022	2022
		埼玉県	全国*
三類	コレラ	-	1
	細菌性赤痢	-	16
	腸管出血性大腸菌感染症	144	3,370
	腸チフス	1	16
	パラチフス	-	10

*全国は診断週(1~52週)の集計値

(-:0)

ア 腸管出血性大腸菌感染症

男性 57 人、女性 87 人の計 144 人の届出があり、前年の 136 人よりやや増加した。症例の年齢は 0 歳から 90 歳代に分布した。年齢階級別では、20 歳代が 30 人と最も多く、次いで 30 歳代が 28 人であった。類型別では、患者 98 人、無症状病原体保有者 46 人で、患者は昨年に引き続き増加した(図 I-1-5)。0 血清型は、0157 が 90 人と最も多く、次いで 026 が 21 人であった。年齢階級別では、0157 の検出が多かったのは 20 歳代及び 30 歳代、026 の検出が多かったのは 30 歳代及び 40 歳代であった(表 I-1-6)。届出は 7 月が最も多く、例年の流行期である 6 月～9 月の届出数は 91 人で、前年の 58 人から大きく増加した(図 I-1-6)。

患者における 0 血清型別の割合は、0157 が 72.4% (71 人)、026 が 15.3% (15 人) で、前年に比べ 0157 は増加し、026 は減少した。その他の血清型は 0103、0111 及び 0121 が各 2 人、071、076、0145 及び 0165 が各 1 人、その他に OUT が 1 人、不明が 1 人であった(図 I-1-7)。なお、無症状病原体保有者では、0157 が 19 人、026 が 6 人、08、084、091、0103、0112ab 及び 0156 が各 2 人、048v、065、066、078、088、0115、0128、0146 及び 0174 が各 1 人であった。

溶血性尿毒症症候群 (HUS) 患者は、70 歳代の女性 2 人の発症が確認された。検出された大腸菌の 0 血清型は共に 0157 であった。

表 I-1-6 腸管出血性大腸菌感染症 年齢階級別届出数

年齢階級	症例数	性別		類型		血清型		
		男性	女性	患者	無症状病原体保有者	O157	O26	その他
10歳未満	17	9	8	12	5	10	3	4
10歳代	21	8	13	14	7	15	3	3
20歳代	30	11	19	22	8	18	2	10
30歳代	28	14	14	15	13	18	4	6
40歳代	15	5	10	9	6	8	5	2
50歳代	11	2	9	8	3	5	3	3
60歳代	12	6	6	11	1	8	1	3
70歳代	7	1	6	5	2	6	-	1
80歳代	2	-	2	1	1	1	-	1
90歳以上	1	1	-	1	-	1	-	-
合計	144	57	87	98	46	90	21	33
割合	100.0%	39.6%	60.4%	68.1%	31.9%	62.5%	14.6%	22.9%

(-0)

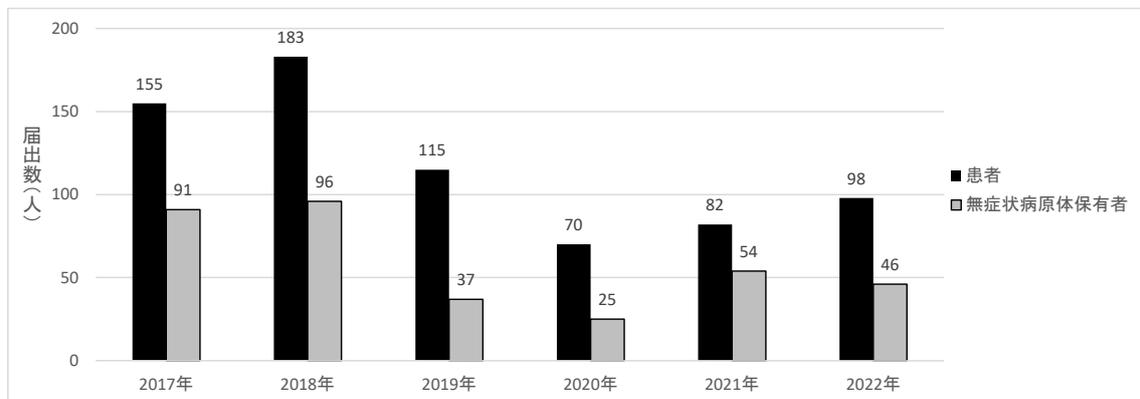


図 I-1-5 腸管出血性大腸菌感染症 類型別届出数 (2017~2022年)

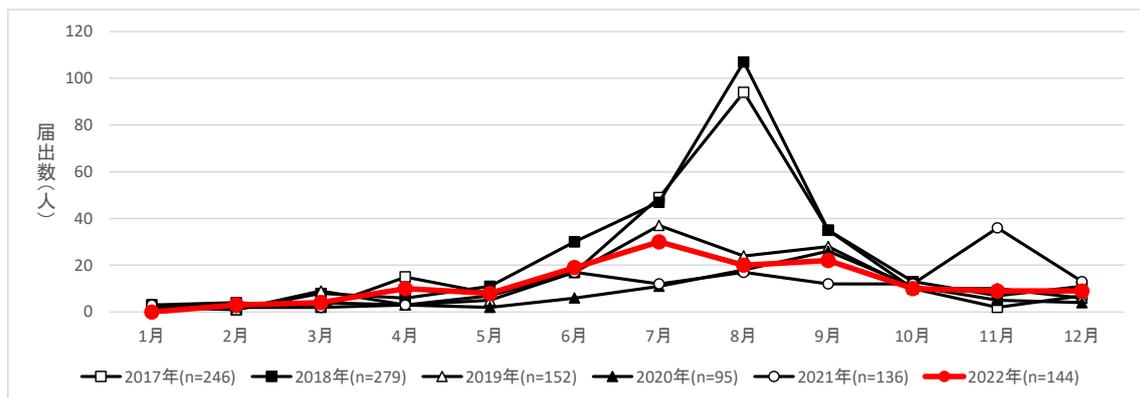


図 I-1-6 腸管出血性大腸菌感染症 月別届出数 (2017~2022年)

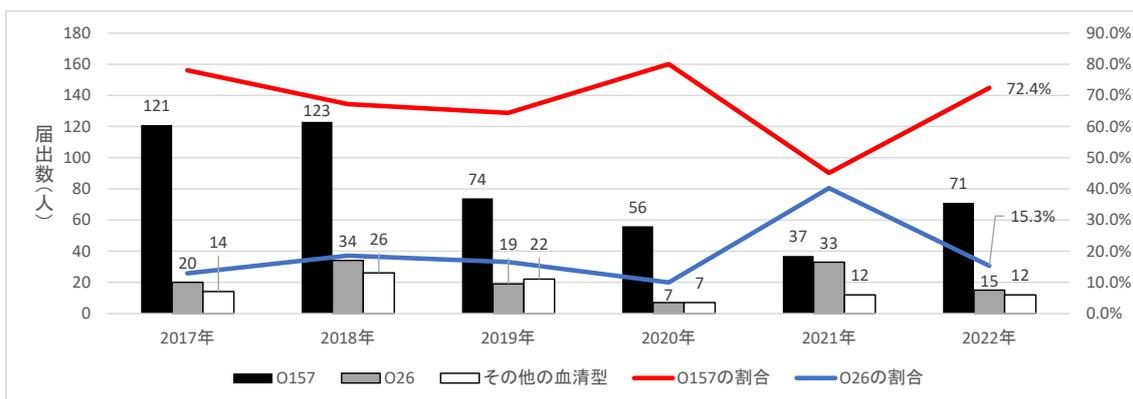


図 I-1-7 腸管出血性大腸菌感染症 患者の O 血清型の届出数と割合 (2017~2022 年)

イ 腸チフス

10月に女性20歳代1人の届出があり、前年の2人を下回った。類型は患者で、診断方法は血液からの分離・同定による病原体の検出であった。推定感染地域はミャンマーであった。

4) 三類感染症の病原体検出状況

2022年に埼玉県内で分離された三類感染症細菌は、腸管出血性大腸菌138株、チフス菌1株の計139株で、コレラ菌、赤痢菌、パラチフスA菌は分離されなかった。このうち国外感染例からの分離は、チフス菌1株であった。国内感染例からの分離は、腸管出血性大腸菌138株であった(表I-1-7)。

表 I-1-7 三類感染症 病原体検出状況 (2022 年)

	コレラ菌	赤痢菌	腸管出血性大腸菌	チフス菌	パラチフスA菌	合計
国外感染	-	-	-	1	-	1
国内感染	-	-	138	-	-	138
合計	-	-	138	1	-	139

(-0)

ア 腸管出血性大腸菌

県内で分離された腸管出血性大腸菌は138株であった。血清型別では、26血清型が検出された。最も多く検出された血清型はO157:H7で80株(58.0%)であった。次いでO26:H11で20株(14.5%)、O157:H-が6株(4.3%)、O103:H2が3株、その他の血清型は2株以下であった。毒素型では、VT1&2が61株(44.2%)、VT2が42株(30.4%)、VT1が35株(25.4%)であった(表I-1-8)。

表 I-1-8 腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型（2022 年）

血清型	毒素型			計
	VT1	VT2	VT1&2	
O157:H7	2	28	50	80
O157:H-	1	2	3	6
O26:H11	17	1	2	20
O103:H2	2	-	1	3
O103:H25	1	-	-	1
O8:H-	-	2	-	2
O84:H2	2	-	-	2
O91:H-	-	-	2	2
O111:H-	-	-	2	2
O112ab:H2	2	-	-	2
O121:H19	-	2	-	2
O156:H-	2	-	-	2
O48v:H45	-	1	-	1
O65:H2	1	-	-	1
O66:H45	1	-	-	1
O71:H2	1	-	-	1
O76:H19	1	-	-	1
O78:H-	1	-	-	1
O88:H25	1	-	-	1
O115:H1/H12	-	1	-	1
O128:H2	-	-	1	1
O145:H-	-	1	-	1
O146:H-	-	1	-	1
O165:H-	-	1	-	1
O174:H21	-	1	-	1
OUT:H21	-	1	-	1
合計	35	42	61	138

(数値部分の-:0)

イ チフス菌

チフス菌は、10月に20歳代女性から1株分離された。ミャンマーへの海外渡航歴があり、発症状況から国外での感染が疑われた。ファージ型はD2であった。